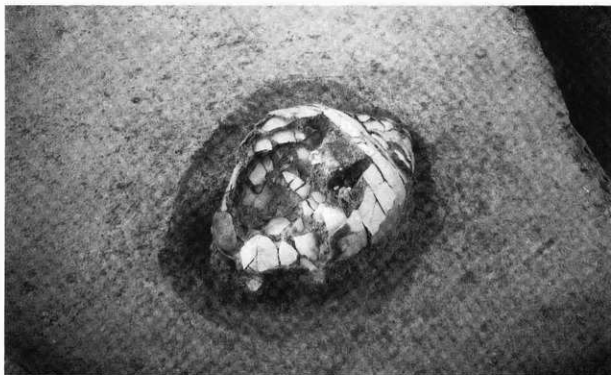


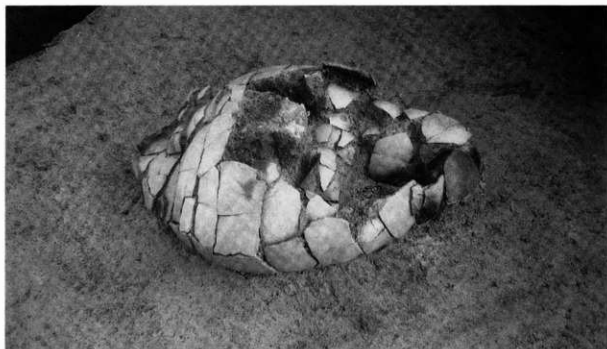
4号溝・土器棺墓（北西より）

#### 土器棺墓

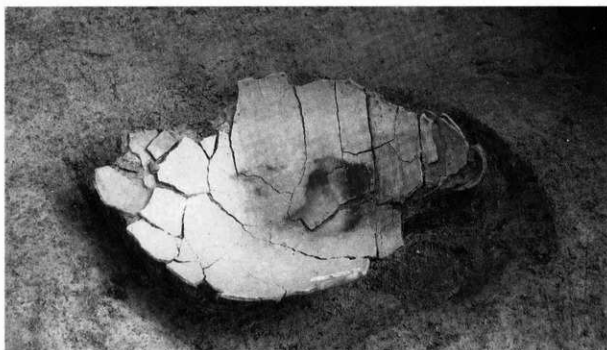
22号住居内から検出されたもので、これよりも新しい。検出土壌は南北1.2m、東西0.9m程の楕円形を呈する。主体部の壺は横に埋納され、頸部より上、底部は欠損している。底部の覆いとして図61-1の壺が、頸部には図60-3の壺体部上半がかぶされていた。主体部の壺は残高68cm体部最大径58.8cmを測る。体部は卵形を呈し、体部下半が椀を形成しなく、丸味をもって底部に至る。1の壺は頸部より上を欠損する。体部は球形をなす。図60-3は大形の壺である。これらは赤色塗彩されることなく1次調整のハケ痕が残存する。棺内からはライトブルー色のガラス玉が2個出土した。



土器棺墓（南西より）



土器棺墓の検出状態



土器棺墓の墓域と内面



図60 土器棺墓出土遺物①(1・2-1)

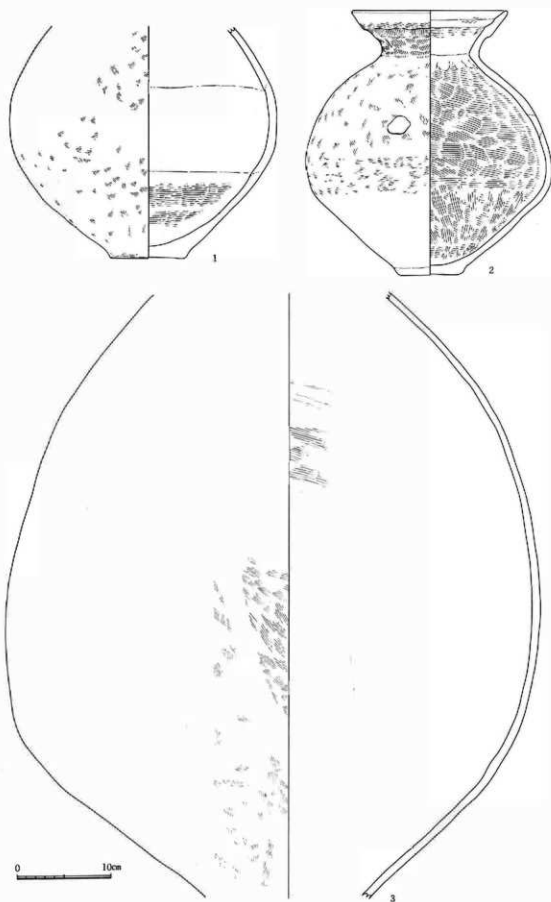


图61 土器棺墓出土遺物①・4号溝出土遺物②

### 5号溝

4号溝より西へ5m程のところに東側溝外縁がある。41号住居を切り込み、35号住居に切られる。東西溝外縁の法量は13.3mを測り、南北間は調査地内で北東隅部の屈曲部にあたり、東西間と同様な数値になるものと思われる。溝幅はほぼ一定し、1.6m前後になり、検出面からの掘り込みは90~60cmの深さになる。底面は平坦である。方形周溝墓であろう。

遺物の出土量が多いが、ほとんどが小破片である。器種には小形甕(図63-1)・有段口縁壺形土器(2・3)があり、弥生時代後期の壺・甕・高坏・蓋が混入出土している。

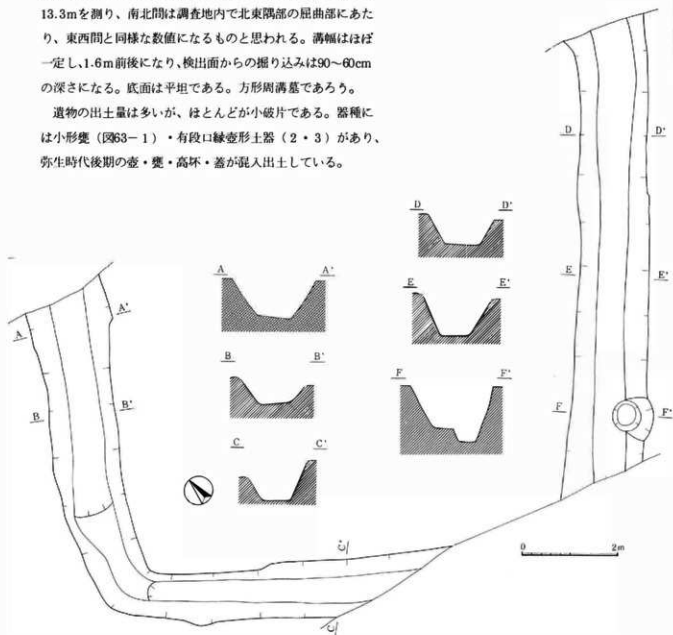


図62 5号溝

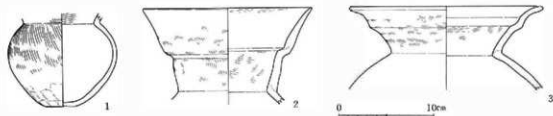
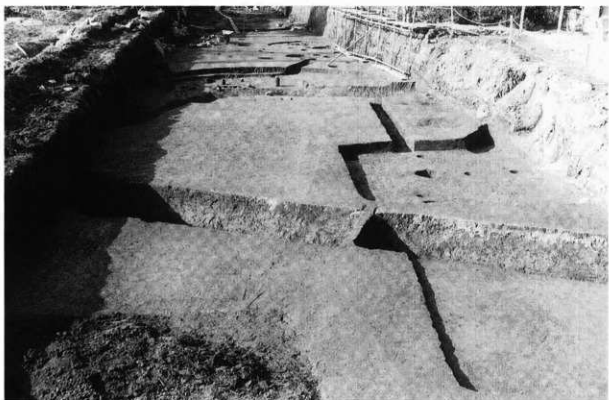


図63 5号溝出土遺物



5号溝（北西より）



5号溝（東より）

### 8号溝

調査地中央付近の弥生時代遺構群の一つである。47号住居を掘り込み、47号・51号住居に切られる。調査地内で直角に折れるが西方に対辺が認められない。形態は東側外縁が不整形になる。最大幅約3m、深さ10cm内外の規模になる。

遺物の出土量が多いが、小破片である。器種には壺(図65-3・4)・甕(5~18・高坏(1・2)がある。この他に粘板岩製打製石斧(19)・閃緑岩製太型始刃石斧(20)が出土している。

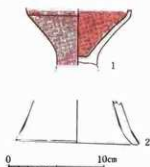


図64 8号溝

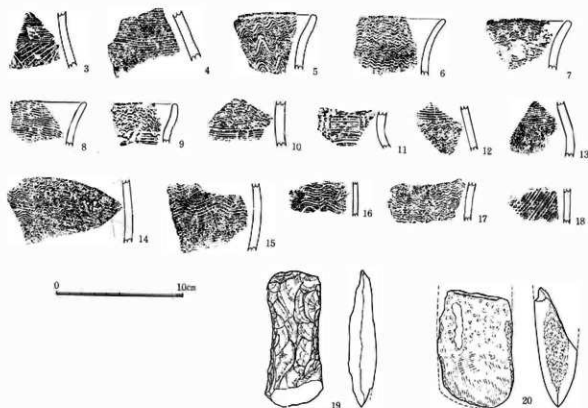


図65 8号溝出土遺物(19・20-子)

### 11号溝

調査地中央より西側に位置し、調査では南半分ほど検出したにすぎない。基本形態は方形を呈するものと思われるが、西側では途中で切れてしまい全周しない。いわゆる陸橋を有する方形周溝墓形態である。東西間外縁の計測値は11mである。溝幅は1.4~0.6mの規模で、深さは東・西溝で浅く8~6cm、南溝が深く60cm前後になる。

遺物の出土量は少ない。器種には壺(図67-1・4)・変形土器(2)・高坏(3)・浅鉢がある。壺は文様帯を残し口縁部の内外面とも赤色塗彩が施される。2・3の外表面も赤色塗彩される。壺の文様はT字状文である。3の高坏脚部には4個の三角形透孔がうがられる。2の用途は不明である。

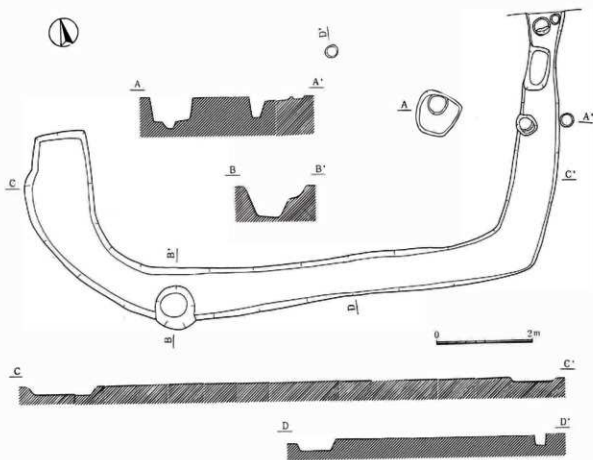


図66 11号溝

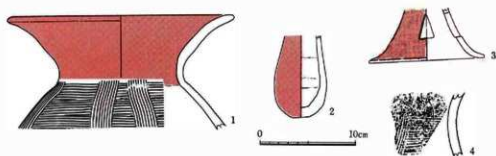


図67 11号溝出土遺物



11号溝 (東より)

### 13号溝

調査区西方に位置し、単独で検出された。ほぼ南北に走行する幅広い溝で、2.4m、深さ10cm前後を測る。底面は平坦である。

遺物の出土量は少ない。器種には壺・甕(図68-2)・高坏(1)・浅鉢が見受けられる。高坏には赤色塗彩が施される。

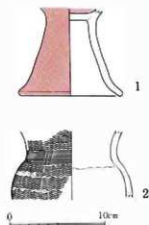


図68 13号溝出土遺物

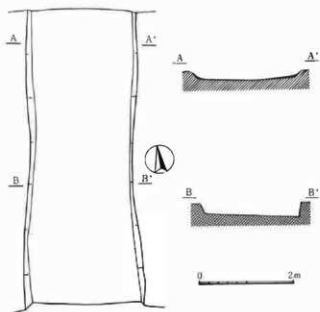


図69 13号溝



#### 15号溝

弥生時代の遺構としては最も西に位置する。隣接して平安時代の16号溝が同方向に走行する。幅50cm前後、深さ8cm程の規模になる。遺物の出土量は少ない。器種には甕・高杯(図70-1・2)がある。1・2は共に外面及び坏部内面に赤色塗彩が施される。1の脚部には3個の三角形透孔があげられる。

#### 46号住居

調査地中央付近の弥生時代遺構群の一つで、調査では南東隅の一部を検出したにすぎない。形態は隅丸長方形を呈するものと思われる。

遺物は小破片が数点出土しているのみで、図示できるものはない。

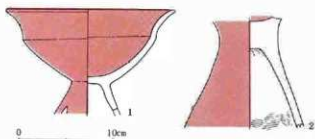


図70 15号溝出土遺物

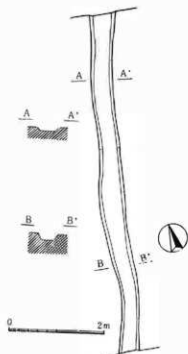
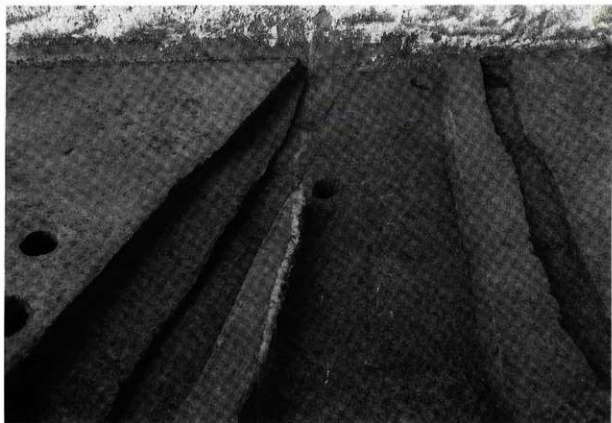


図71 15号溝



15号溝(右)と16号溝(南より)

### 溝状遺構

調査地中央付近の弥生時代遺構群の一つである。遺構は南北に展開し、西壁はガス・水道管が埋設されているため確認できなかったが、東西幅5m前後の規模になるものと思われる。東壁の検出面からの掘り込みは36cm程で、底面は平坦で軟弱である。また底面には足跡状の小さな落ち込みが無数に見られた。

遺物は弥生時代後期の土器を主体に割合に多く出土している。器種には赤色塗彩された埴（図73-1）・壺・甕（2）・高坏・蓋がある。1は古墳時代初頭に位置するもので、底部が穿孔される。このほかに土製紡錘車（3）・閃緑岩製太型蛤刃石斧（4）が出土している。

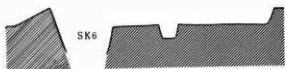


図72 溝状遺構

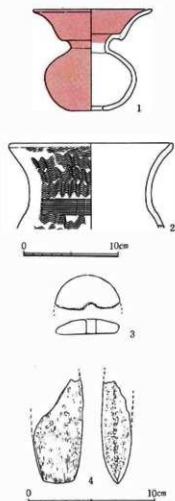
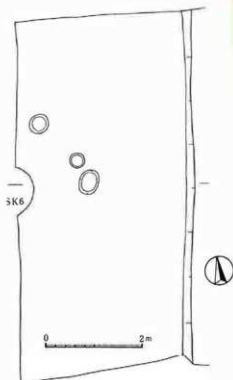


図73 溝状遺構出土遺物（3・4-1/2）



溝状遺構（南より）

## 5 古墳時代中期

### 25号住居

調査地東側住居群の一つで、13号・17号住居により、南側の大部分が切り込まれ、調査では西壁沿いの一部を検出したにすぎない。検出面からの掘り込みは22cm程をはかり、床面は南に傾斜する。形態を隅丸方形と予想するが、柱穴等の施設は確認できなかった。

遺物の出土量は少なく、それも破片出土である。器種には壺・杯・高坏(図75-1・2)がみられる。高坏の坏部は皿形で、口縁部と体部の接点が鈍い稜を形成する。

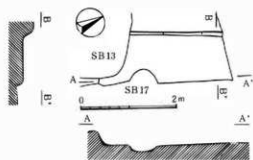


図74 25号住居

### 19号住居

調査地東側の遺構群の一つで、3号・5号・18号住居と重複関係にある。

3号・5号より古く、18号より後出の住居である。また東南には壁と思われる掘り込みが見られ、番号を付していない遺構の存在が予想される。このため本遺構の壁の確認はなく形態は不明である。内に南北1.02m程の不整形形を呈す土塊状掘り込みがある。

遺物の出土量は少なく、土器のほとんどが土塊状ピット内より出土した。器種には壺・高坏(図77-1~4)・小形丸底形土器(5・6)がある。このほかに断面台形を呈する鉄製品(7)がある。



図75 25号住居出土遺物

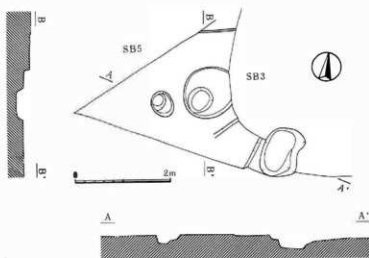


図76 19号住居

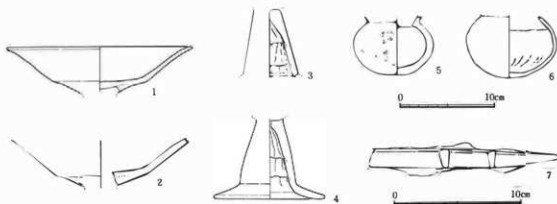


図77 19号住居出土遺物(7-1)

## 6 奈良・平安時代

### 1号住居

調査地東端に位置し、6号住居と重複関係にあり、これよりも新しい。調査では北西隅付近を中心に、全体の1/4程を検出したにすぎない。形態は方形を呈するものと思われる。焼土は住居中央と西壁下中央付近に認められ、後者が本住居のカマドであろう。カマド推定地にはピット状掘り込みが認められ、焼土をはさむ両側のもはカマド構築石が抜かれた残存痕跡と考えられる。掘り込みは15cm内外である。床面は平坦で軟弱である。柱穴状のピットは中央付近に3個検出されているが、住居形態からみて主柱穴とは考えにくい。北

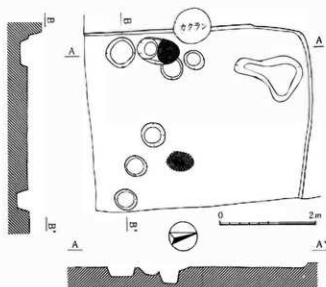


図78 1号住居

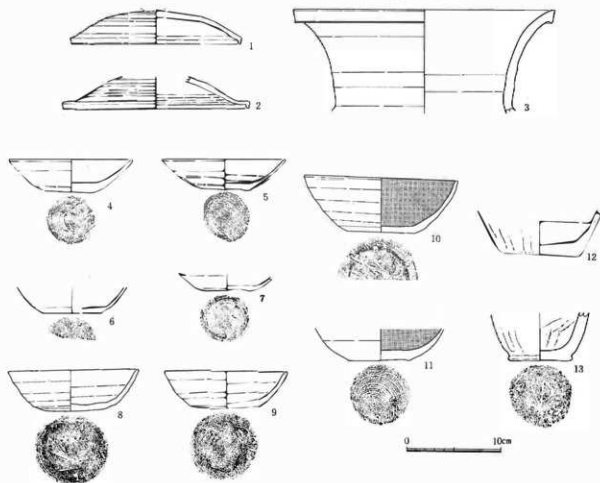


図79 1号住居出土遺物①



1号住居（南より）

西隅付近には不整形の掘り込みが見られ、貯蔵穴であろうか。遺物の出土はカマド及び住居中央の焼土付近からのものが多い。

遺物の出土量は図示した土器の割合にはそれほど多くない。器種には須恵器蓋（図79-1・2）・坏（4～9）・壺（3）、土師器坏（10・11）・甕（12・13、図80-1）がある。蓋はつまみ部を欠損する。坏のうちクロコからの器体の切離を糸によるもの（4～7・11）とヘラ状工具によるもの（8～10）の2種があり、土師器には内面が研磨され黒色処理される。甕の13は底部に木葉状痕があり、前代の所産と思われるまぎれ込みであろう。図80-1は所謂武蔵型の甕で、肩部は横位の、それ以下底部に至るまで上から下へヘラケズリ調整が施され体部器壁を薄くしている。土器のほかに、軽石製磨石（図80-2）、粘板岩製砥石（3）が出土している。両者ともに両面に使用痕がある。

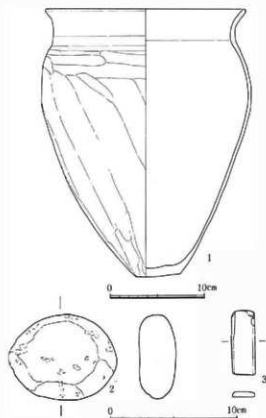


図80 1号住居出土遺物の②（2・3-1）

## 2号住居

調査地東端の遺構群の中で最も後出の住居である。調査では北壁沿いの一部が未検出である。カマドは西壁に構築され、構築石材・焼土等を残す。主柱穴の配列はやや不整形形であるが4個方形配列になる。掘り込みは20cm内外で、床面は中央に向けやや凹む。

遺物の出土量は少ない。器種には須恵器甕・坏(図82-1)・高台付坏・蓋、土師器甕(2)がある。坏の底部には糸切痕と非回転・回転ヘラ切離痕を残すものの両者がある。甕の体部調整はハケによる。土器のはかに鉄製斧(3)が出土している。

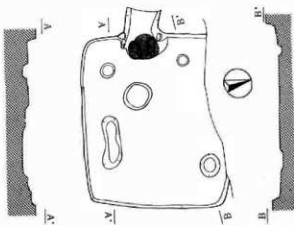


図81 2号住居

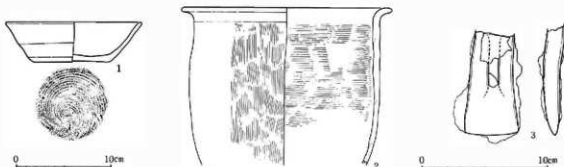


図82 2号住居出土遺物(3-1)



2号住居(東より)



2号住居のカマド

### 3号住居

2号・9号・10号・18号・19号住居と重複関係にあり、2号・9号より古く、10号・18号・19号より新しい。形態は隅丸方形を呈し、南壁を除き壁下に周溝がめぐる。主柱穴は4個方形配列である。カマドは北壁中央に設けられ、調査では長い煙道と焼土塊化した火床及び石材抜き取り痕を検出したにすぎない。床面は南・東に傾斜するが、堅緻なものである。南壁近くに焼土が認められたが、他の遺構のものとは推定される。

遺物の出土量は比較的多い。器種には須恵器杯（図84-1・6～9）・高台付杯（2～5）・高坏・広口壺・横瓶・蓋、土師器杯（10）・甕（11～13）がある。須恵器底部の切離・調整は全てヘラによっている。

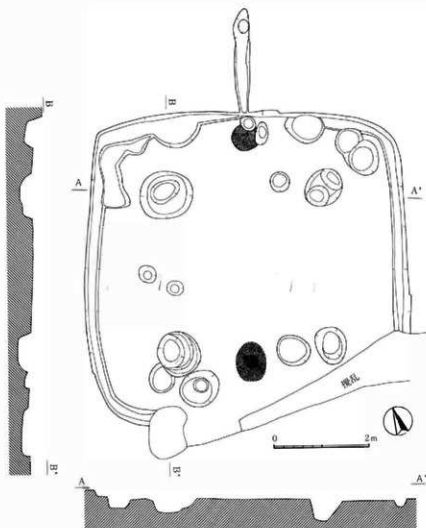


図83 3号住居



3号住居（西より）



3号住居（北西より）





3号住居のカマドと煙道

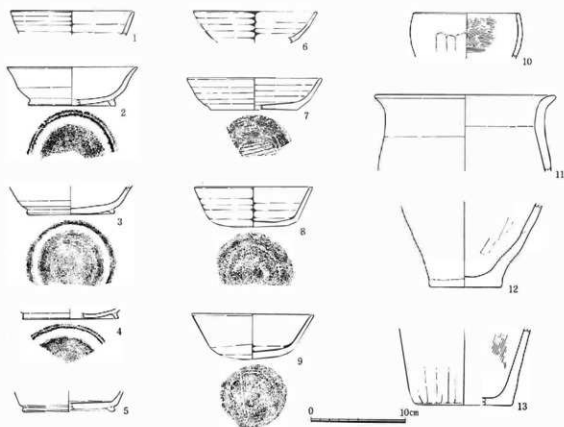


図84 3号住居出土遺物

### 5号住居

8号・18号・19号・24号と重複関係にあり、最も後出の住居である。調査では北側半分程を検出した。床面は凹凸を有するが堅緻なもので、北壁側に幅広の浅い落ち込みがある。カマドは東壁中央付近に構築されていたが、焼土塊を残す火床が残存していたにすぎない。支柱穴は定かでないが4個方形配列を推定する。

遺物の出土量は割合多い。器種には須恵器坏(図87-2~9)・高台付坏(1)・甕・細口瓶・蓋、土師器坏(13~15)・台付皿(10・11)・椀(12)・甕(16~18)がある。坏・皿類のロクロ切離は糸によっている。この他に砂岩製砥石(図85)が出土している。



図85 5号住居出土遺物①(↓)

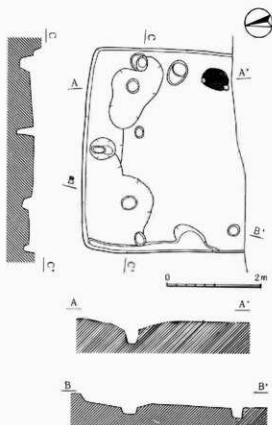
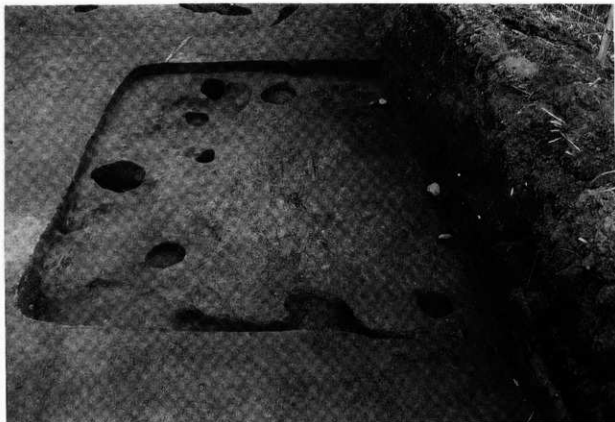
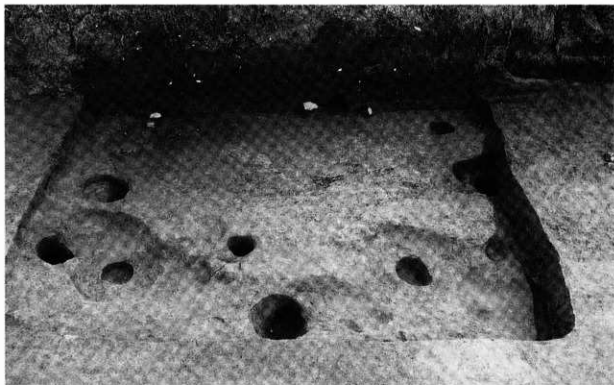


図86 5号住居



5号住居(北西より)



5号住居（北東より）

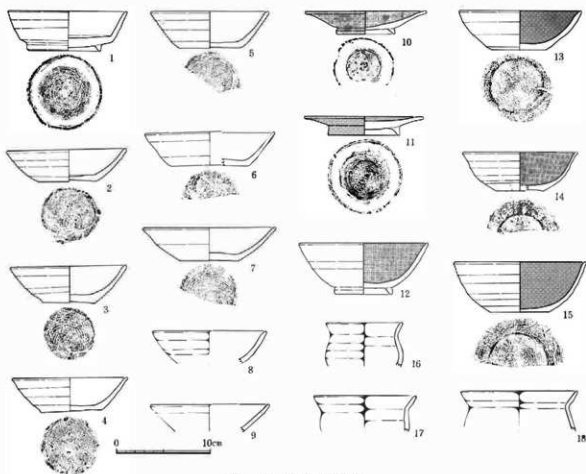


図87 5号住居出土遺物①

### 6号住居

調査地東端に位置し、1号住居に切られる。形態は方形を呈し、掘り込みは10cm程で浅い。

遺物の出土は少量で、図示できるものはない。

### 7号住居

16号・17号・23号住居と重複関係にあり、最も後出の住居である。調査では南側半分程を検出したにすぎない。カマドは東壁中央付近に設けられ、構築石材が周辺に散乱していた。柱穴状ピットが3個確認されたが主柱穴ではない。床面は若干西傾し、軟弱なものである。

遺物の出土量は比較的多い。器種には灰釉陶器台付皿(図89-1)、須恵器高台付杯(2)・杯(3~7)・甕・蓋、土師器杯(8・10~17)・台付皿(9)・甕(18)がある。杯・皿類のロクロからの切離は全て糸切で、内面黒色処理されるものは回転ヘラケズリにより調整される。このほかに棒状の鉄製品が2点(19・20)出土している。

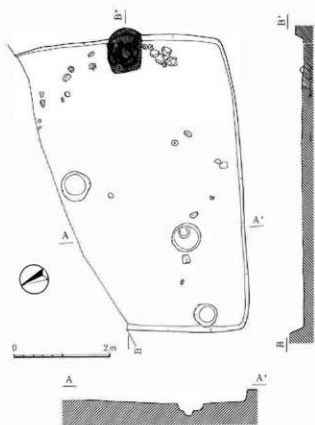
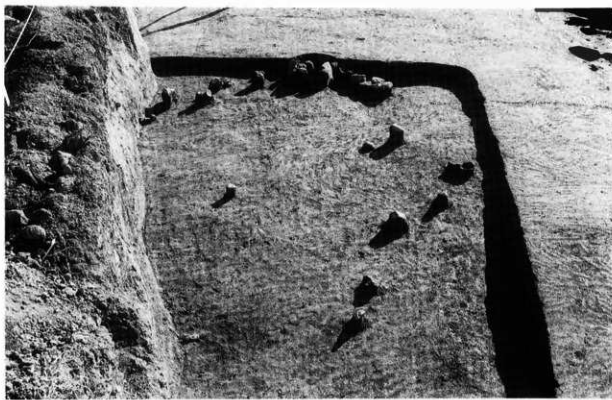


図88 7号住居



7号住居(北西より)



7号住居のカマド

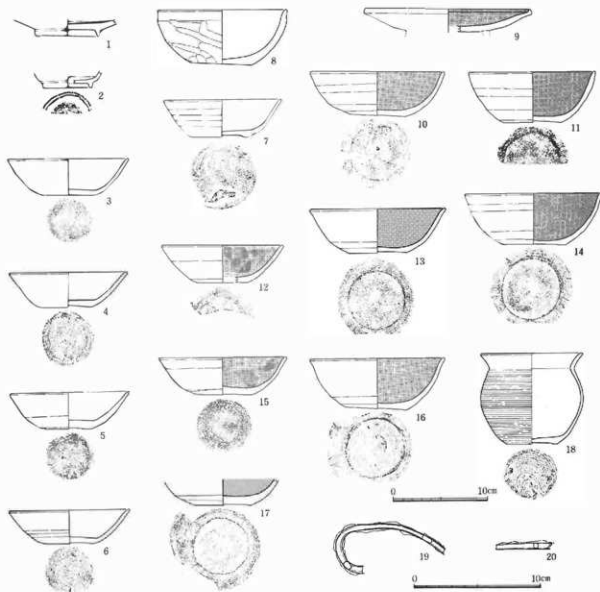


図89 7号住居出土遺物 (19・20- $\frac{1}{2}$ )

### 8号住居

調査地東側遺構群の一つで、5号・24号住居と重複関係にあり、24号より新しく5号により東半分程は掘り込まれる。形態は方形が予想され、その規模は不明である。検出面からの掘り込みは23cm程になる。カマドは西壁中央に構築されているが、調査では58cmの範囲に焼土・炭化物を認めたにすぎない。柱穴等の施設は確認できなかった。

遺物の出土量は少ない。器種には須恵器杯・高台付杯・甕、土師器杯・甕（図91-1～3）がある。土師器杯の内面は黒色を呈する。甕は口縁部下方が肥厚し外反するのが特徴的である（1・2）。2にはハケによる調整痕を残す。

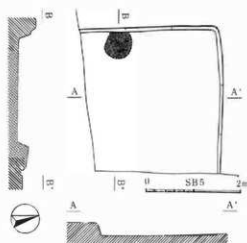


図90 8号住居

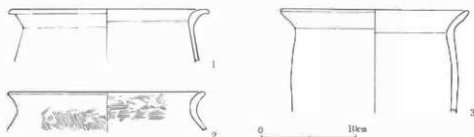
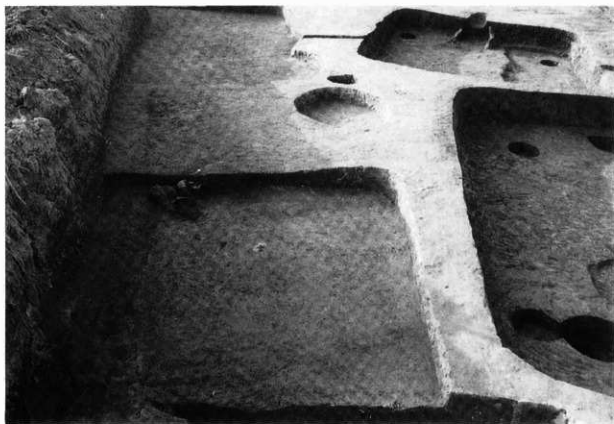


図91 8号住居出土遺物



8号住居とその周辺（東より）

### 9号住居

重複する2号住居より古く、3号・10号住居より新しい。カマドは東壁中央にあり、片袖と焼土を残存する。主柱穴は4個の不整形形配列と考えられる。床面は平坦で軟弱である。

遺物の出土量は少ない。器種には須恵器蓋（図93-1）・坏（2）・甕（3）、土師器坏・甕がある。土師器坏は内面黒色処理され、甕はロクロ調整のものである。

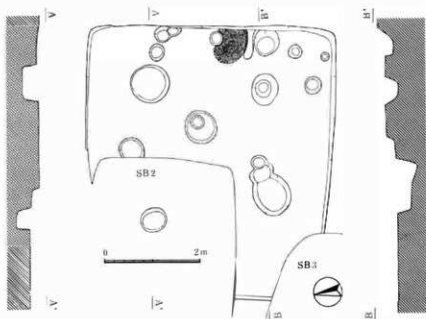


図92 9号住居

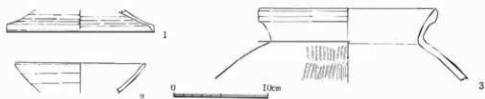


図93 9号住居出土遺物



9号住居（西より）

### 11号住居

13号・30号住居・土壇状遺構と重複関係にあり、最も後出の住居である。調査では北側2/3程を検出した。カマドは北壁中央に構築されるが、構築石材・焼土・煙道を確認したにすぎない。柱穴等は確認できなかった。

遺物の出土量は少ない。須恵器台付杯・高台付盤・高坏(図95-2)・甕、土師器杯・甕がある。このほか火山弾裂閃石(1)が出土している。

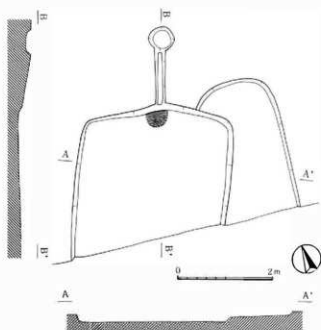
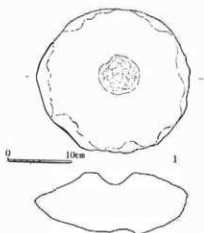


図94 11号住居



図95 11号住居出土遺物(1-1/2)



11号住居(南西より)



### 12号住居

該期のもとしては単独で検出された。形態は方形を呈するが北壁にくい違いを見せる。掘り込みは20cm程である。床面は中央付近が堅緻で、周辺部は軟弱である。カマドは北壁中央にあり、突出した形態のものであるが、構築石材・焼土が残存していたにすぎない。遺物のほとんどはこの周辺からの出土である。

遺物の出土量は少ない。器種には須恵器杯(図97-1・4・5)・高台付杯(3)・蓋(2)、土師器杯・甕がある。6は鉄製紡錘車であるが、鉄芯は折り曲げられている。

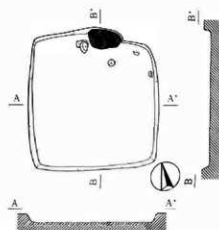


図96 12号住居

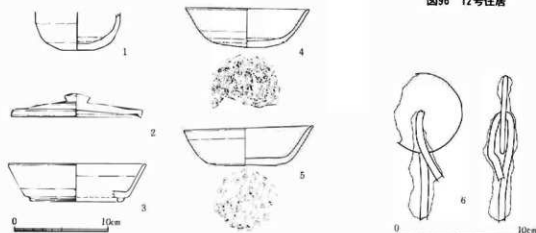
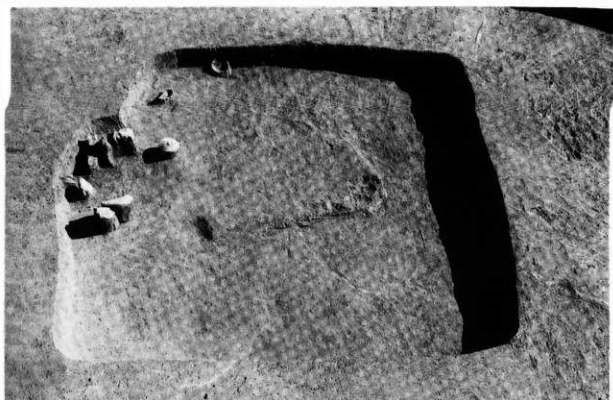


図97 12号住居出土遺物(6-1)



12号住居(西より)

### 13号住居

11号・25号・31号住居と重複関係にあり、11号より古く、他のものより新しい。検出面からの掘り込みは8～40cmを測る。カマドは西壁中央にあり、粘土製両袖形のものである。各壁隅部付近に4個の支柱穴がある。床面は堅緻である。

遺物の出土量は少ない。器種には須恵器杯(図99-2～4)・蓋(1)・甕(5)、土師器杯・甕(6・7)がある。この他に鉄製紡錘車(8)が出土している。

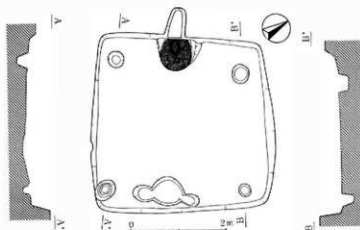


図98 13号住居

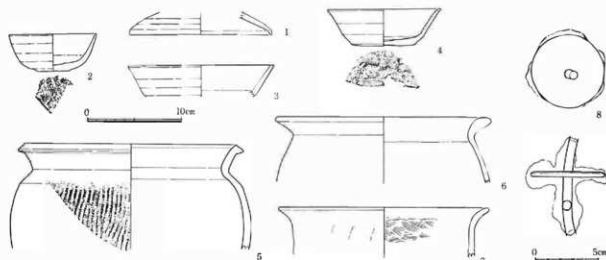


図99 13号住居出土遺物(8-1)



13号住居(南東より)

### 16号住居

調査地東側道構群の一つで、7号・23号住居と重複関係にあり、前者より古く、後者より新しい。形態は方形を呈し、東壁中央にカマドを構築する。床面は軟弱で凸凹がある。北西隅に直径1.2mの土壇状円形ピットが二段に掘られている。上部遺構の調査では確認できなかったもので、本住居の付属遺構であると判断するが、性格は不明である。柱穴は配列を見い出せない。

遺物の出土は少量である。器種には須恵器坏（図101-1～3）・高台付坏・甕、土師器坏（4・5）・甕がある。須恵器坏のロクロからの切離はヘラによっているのに対し土師器のそれは糸である。土師器坏の内面は研磨され黒色処理が施される。

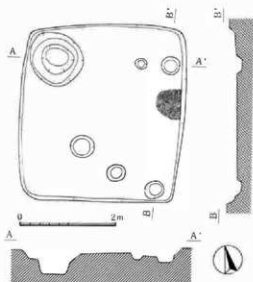


図100 16号住居

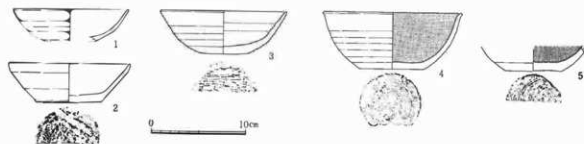
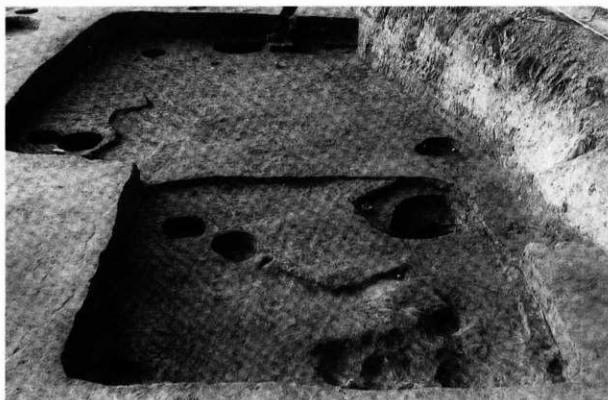


図101 16号住居出土遺物



16号住居（南西より）



16号住居・17号住居（南東より）



17号住居（南東より）

### 17号住居

調査地東側遺構群の一つで、16号住居により東壁の一部が切り込まれ、北壁部は未検出である。形態は隅丸方形を呈し、西壁中央にカマドを構築する。カマドの左右に貯蔵穴と思われる落ち込みがある。柱穴は4個方形配列であろう。掘り込みは42cm前後を測り、床面は平坦で軟弱なものである。

遺物の出土量は少なく、小破片が多い。器種には須恵器杯(図103-1)・高台付杯(2)・甕・蓋・細口壺、土師器杯(3)・甕がある。1の杯は口縁部が立ち上がる古墳時代の蓋杯である。2の底部は回転ヘラケズリで調整され、3の内面は黒色処理が施される。このほか軽石製の磨石(4)、ノミ状の鉄製品(5)が出土している。

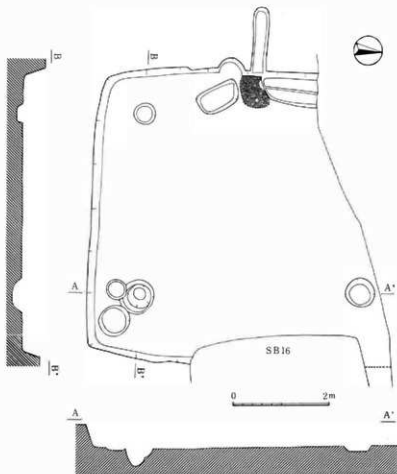


図102 17号住居

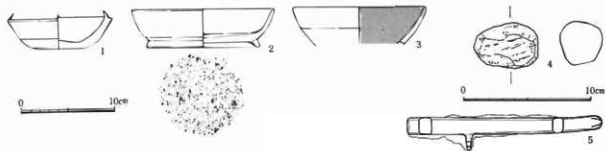


図103 17号住居出土遺物(4・5-1/2)

### 20号住居

15号住居・2号溝により切り込まれ、南側の一部を検出したにすぎない。カマド・柱穴等はなかった。遺物の出土量は少ない。器種には須恵器浅鉢(図104-1)・高台付杯(2)、土師器甕がある。

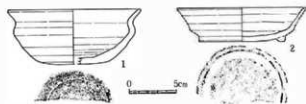


図104 20号住居出土遺物

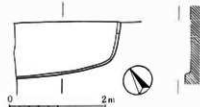


図105 20号住居

### 21号住居

36号住居・2号溝と重複関係にあり、これよりも後出の遺構である。調査では北側半分程検出したにすぎないが、北壁中央付近に張出すカマドを有する方形を呈するものと思われる。掘り込みは25cm程で、床面は北にいくぶん凹み、軟弱である。柱穴は確認できなかった。

遺物の出土量は少ない。器種には須恵器杯(図107-1)・蓋・甕、土師器杯・甕(2・3)がある。3は所謂武蔵型甕で、体部外面はヘラケズリ調整である。このほかに砂岩製砥石(4)が出土している。

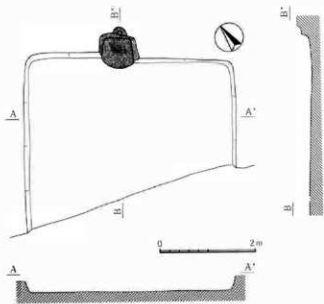


図106 21号住居



図107 21号住居出土遺物(4-1)



21号住居(南西より)

### 28号住居

4号溝に内包され32号住居と重複するが、前後関係は不明である。調査では南側半分程を検出したが、西壁は32号内で納まる。南東隅に柱状ビットが3個確認され、南西隅の土塊状掘り込みを勘案すれば、4個方形配列の主柱穴を予想する。床面は南に傾斜し軟弱である。

遺物の出土量は少ない。器種には乳恵器杯・蓋(図109-1)・甕(2)、土師器甕がある。1はつまみ部付近が欠損し、口縁部が短く、直線的に屈曲する。2の口縁部は内屈する器形で、ロクロ水引き技法により作られている。

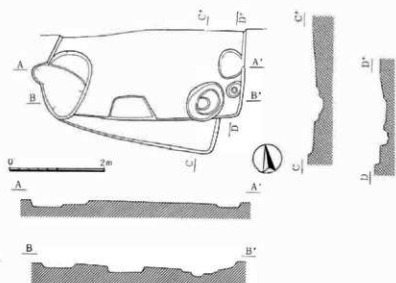
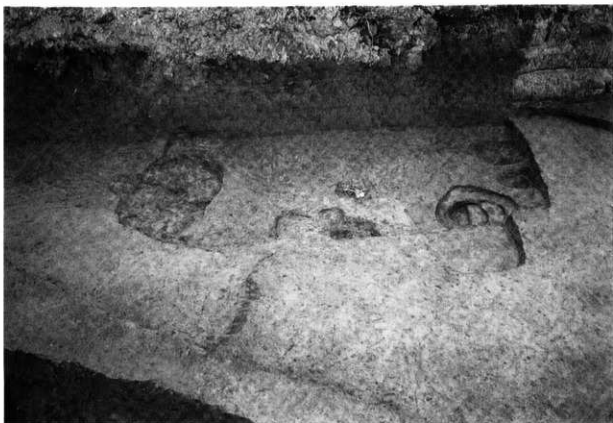


図108 28号住居



図109 28号住居出土遺物



28号住居(南より)

## 29号住居

37号住居、3号・4号溝と重複関係にあり、これよりも後出の遺構である。形態は隅丸長方形を呈するものと思われ、東壁中央にカマドが構築されている。左側部の一部が残存していた他は破壊され、構築石材・炭化物・火床を確認したにすぎない。支柱穴は大きく深いもの2個検出し4個方形配列になるものと思われる。南壁下に周溝が見られる。

遺物の出土量は比較的多い。器種には須恵器坏(図111-3・4)・高台付坏(1・2)・蓋・甕・広口壺・高台付盤、土師器坏(5・6)・甕(7~9)がある。3の底部には刻印が見られ、4は糸切離痕が、7・9には木炭痕がみられる。このほかに滑石製勾玉(10)が出土している。

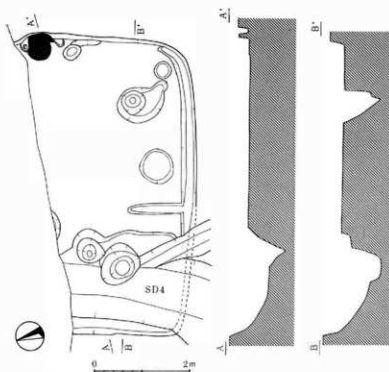
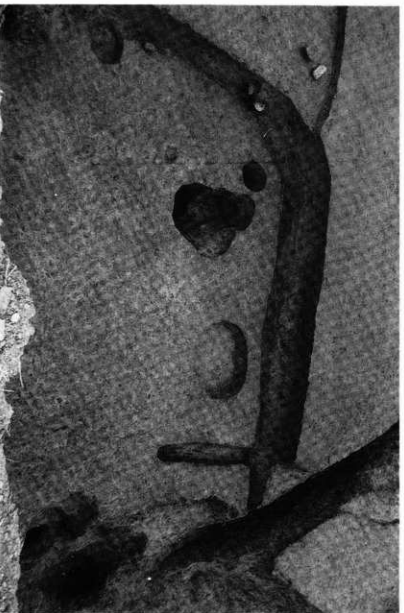


図110 29号住居



29号住居とその周辺(西より)





29号住居(北土ウ)

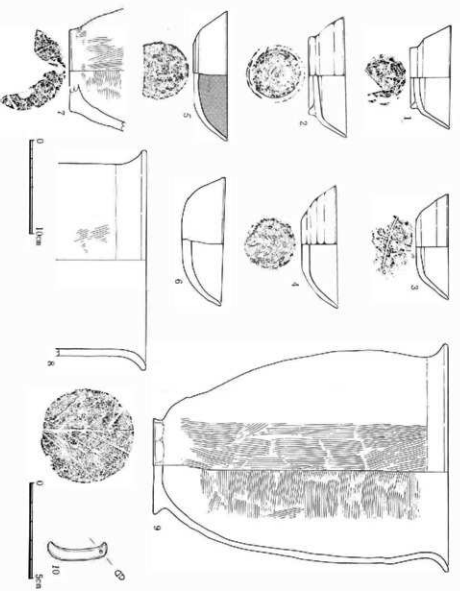


图111 29号住居出土遺物(10—14)

### 33号住居

2軒の住居址の可能性ある。外側のもは東壁の長い台形を呈し、方形を呈する小形のを内包する。小形のもは西壁北寄りにカマドがあり、焼土・構築石材が残存していた。主柱穴は確認できなかった。床面は幾分凹み軟弱である。

遺物はカマド周辺より多く出土した。器種には須恵器杯(図113-2~9)・蓋(1)・甕(10・11)、土師器杯・甕(12~16)がある。杯底部の調整は4の糸切痕を残すほかはヘラによる。14・15には木葉痕がある。16は筒形の体部になる。このほか環状の銅製品(17)が出土している。

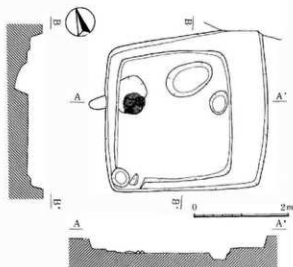
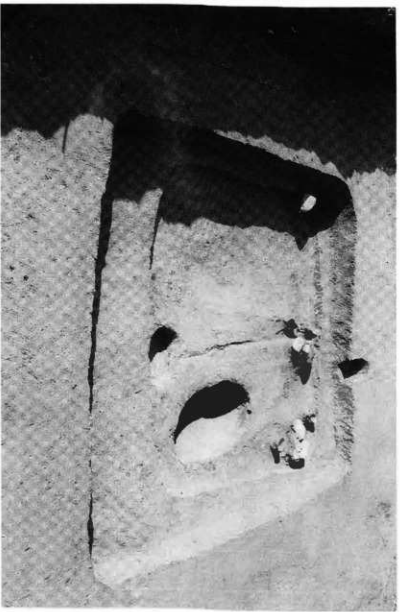


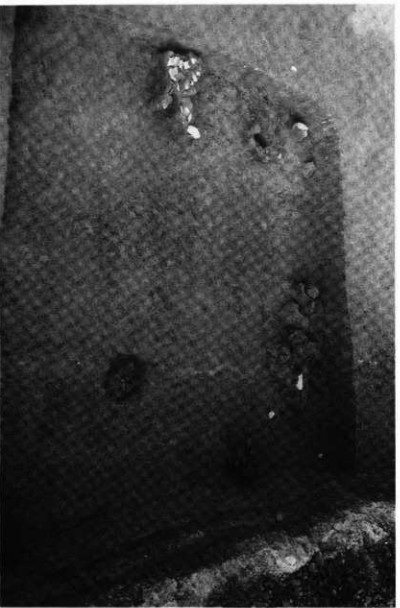
図112 33号住居



図113 33号住居出土遺物(17-1)



33号住居(南東上り)



34号住居(南上り)

### 34号住居

38号住居と重複関係にあり、これよりも後出の住居である。形態は南北が長い長方形を呈するものと思われる。カマドは東壁中央付近に構築され、支脚石・構築石材・炭化物・焼土が見られた。掘り込みは32cmを測り、床面は西に傾斜し軟弱である。柱穴等は認められなかった。

遺物の出土量は比較的多い。器種には須恵器坏（図115-1・2）・釜・甕、土師器坏（3）・甕（4～10）がある。甕の小形品（4・5）は底部から口縁部に至るまでロクロで調整されるのに対し、大形品（6・7）は体部上半以上がロクロにより調整される。他の大形甕はハケとナデ調整で、9には粘土紐の輪積み成形痕が残る。

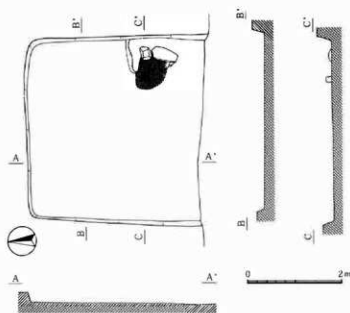


図114 34号住居

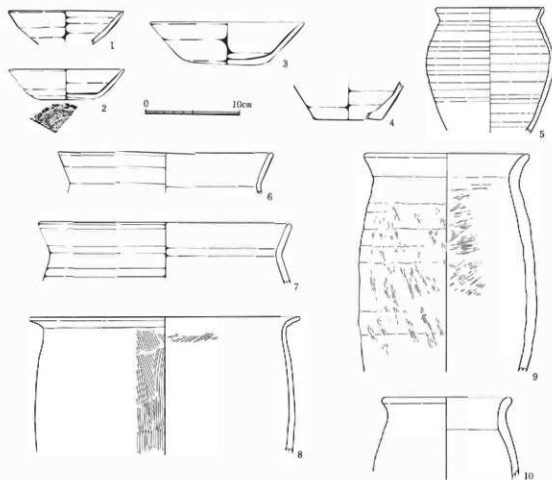


図115 34号住居出土遺物

### 35号住居

5号溝と重複関係にあるが、調査では溝を先行して掘り下げてしまったため、西壁側は不明である。溝の範囲内でおさまるものと思われる。形態は東壁がやや丸味を帯びるが長方形を呈するものであろう。掘り込みは浅く10cm内外で、床面は軟弱で平坦である。

遺物の出土量は少なく、全て破片出土である。器種には須恵器杯（図117-2・3）・蓋（1）・甕、土師器甕（4）がある。2・3の底部は糸切離痕を残し、外周を2がナデ、3がケズリによって調整している。

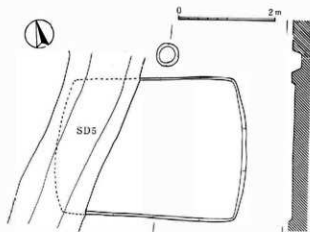


図116 35号住居

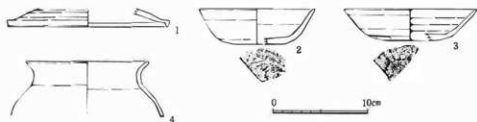
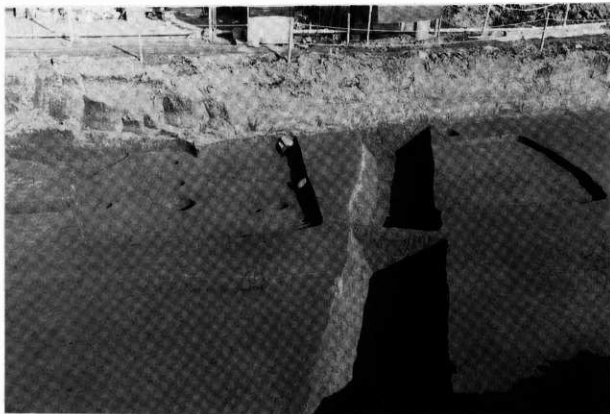


図117 35号住居出土土器



35号住居とその周辺（南西より）

### 36号住居

21号住居、2号・3号溝と重複関係にあり、溝よりも新しく21号より古い。調査では北側半分ほど検出したにすぎないが、形態は方形を呈するであろう。柱穴は住居中央付近に2個ある。床面はやや南に傾斜し軟弱である。カマドは確認できなかった。

遺物の出土量は少ない。器種には須恵器坏土師器坏・甕(図118)がある。



図118 36号住居出土遺物

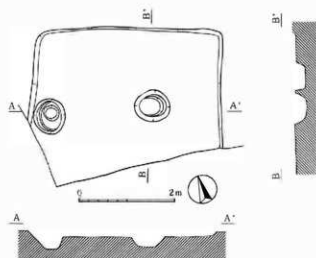
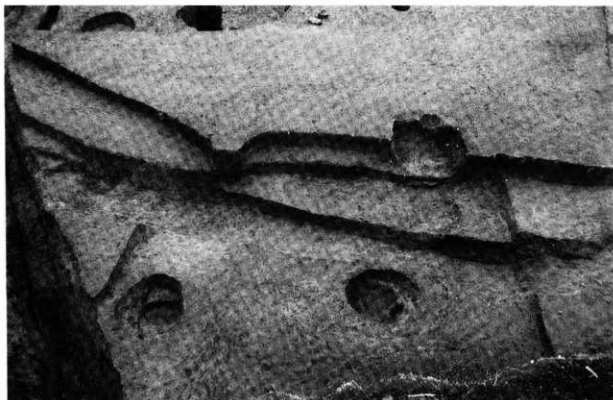


図119 36号住居



36号住居 (南西より)

### 38号住居

この住居も2軒重複している可能性があり、また東側の16cm程差を有する高まりはベッド状遺構の考えも捨て切れない。33号・34号住居と重複関係

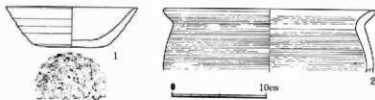


図120 38号住居出土遺物①

にあり、これらより前出の住居である。カマドは西壁中央にありほとんどが34号住居により破壊を受ける。掘り込みは25cm程になり、床面は中央部が幾分高くなる。

遺物の出土量は少ない。器種には須恵器杯(図120-1)・高台付杯・蓋・甕、土師器杯・甕(図121)がある。

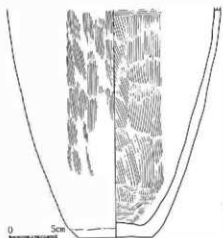


図121 38号住居出土遺物②

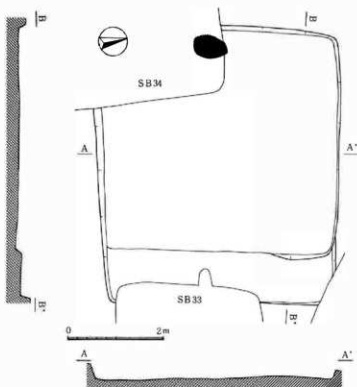
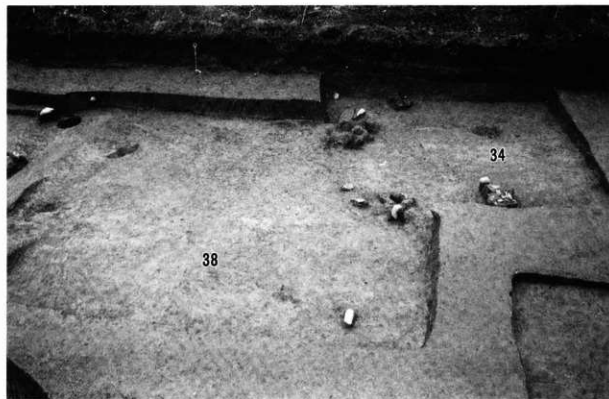


図122 38号住居



34号住居・38号住居(南より)



34号住居・38号住居（北より）



54号住居（南より）



#### 42号住居

40号住居と重複関係にあり、これよりも新しい。調査では南西隅の一部を検出したにすぎず大部分は調査地域外にある。形態は方形を呈するものと思われるが、規模等は不明である。掘り込みは26cm前後であるが東壁側は浅い。床面は西・南に傾斜し、軟弱である。柱穴は南壁下で1個検出されたにすぎない。

遺物の出土量は少なく、それも破片出土である。器種には須恵器杯（図124-1・2）・小形甕、土師器杯（3）・両面黒色台付皿・甕（4）がある。3の内面は研磨され黒色処理される。

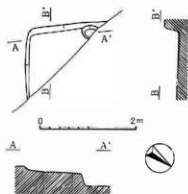


図123 42号住居

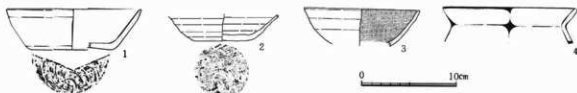


図124 42号住居出土遺物

#### 54号住居

調査地西側で単独で検出されたが、調査では北側半分程検出したにすぎない。形態は方形を呈するものと予想されるが、南北規模は不明である。掘り込みは8cm前後と浅く、床面は平坦で軟弱である。柱穴・カマド等の施設は確認できなかった。

遺物の出土量は少なく、それも破片出土である。器種には須恵器杯（図126-2～4）・高台付杯（1）・蓋・甕、土師器杯・甕がある。1・2の底部はヘラによる切離・調整であるが、4は糸による切離である。

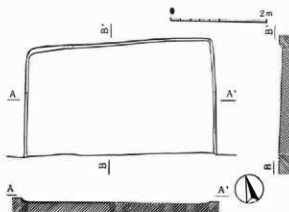


図125 54号住居

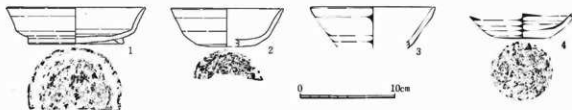


図126 54号住居出土遺物

#### 55号住居

17号溝と重複するが、覆土土質が同質であったため、前後関係は不明である。調査では北側の1/3程を検出したにすぎない。この住居も2軒の重複である。東側の点線部までのものが新しい。形態は方形を呈するものと思われ、西壁中央に焼土塊化した火床があり、カマドと推定する。柱穴は2個確認された。

遺物の出土量は少ない。器種には須恵器杯（図128-6・7）・高台付杯（2～5）・蓋（1）・甕、土師器杯・甕がある。杯の底部の切離痕・調整痕はヘラによっている。

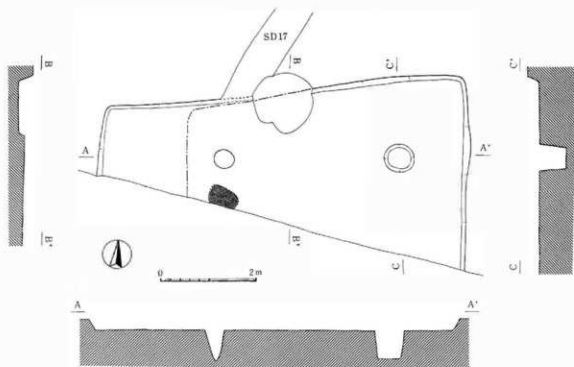


図127 55号住居

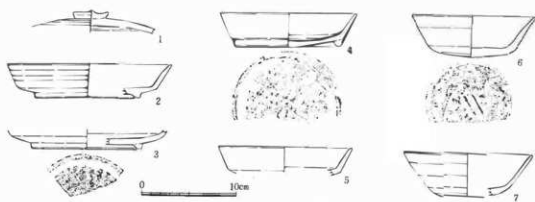


図128 55号住居出土遺物



55号住居 (北西より)

### 58号住居

調査地西端付近に位置し、59号住居と重複関係にあり、これよりも新しい。調査では南半分程を検出した。形態は西壁がやや西に張り出すが、床面の状態から方形を推定する。カマドは南東隅付近にあり、調査時では構築石材が周辺に散在し、焼土塊化した火床及び煙道を確認した。床面は堅緻で中央に向け若干凹む。遺物のほとんどがカマド周辺から出土している。

遺物の出土量は比較的多い。器種には灰釉陶器瓶、須恵器杯（図130-1）・甕、土師器杯（2～10・12）・高台付杯（11）・甕（13～19）がある。杯の底部には糸切痕が残り、内面は黒色処理されたものが多い。甕の体部上半から口縁部にかけてロクロにより調整され、ロクロ目が顕著である。16・19にはロクロ回転によるハケ調整具のカキ目が残る。

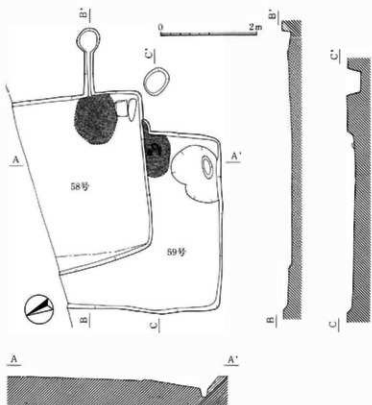
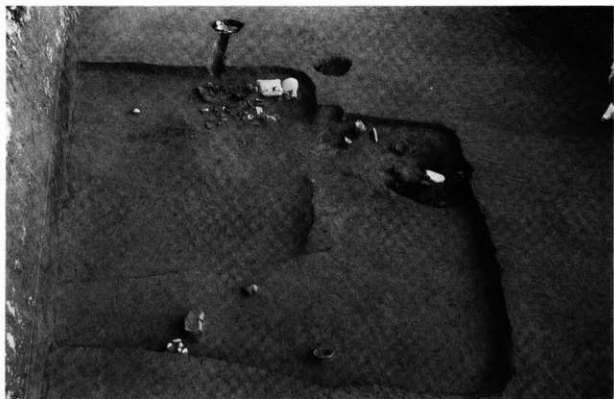


図129 58号住居・59号住居



58号住居・59号住居（西より）

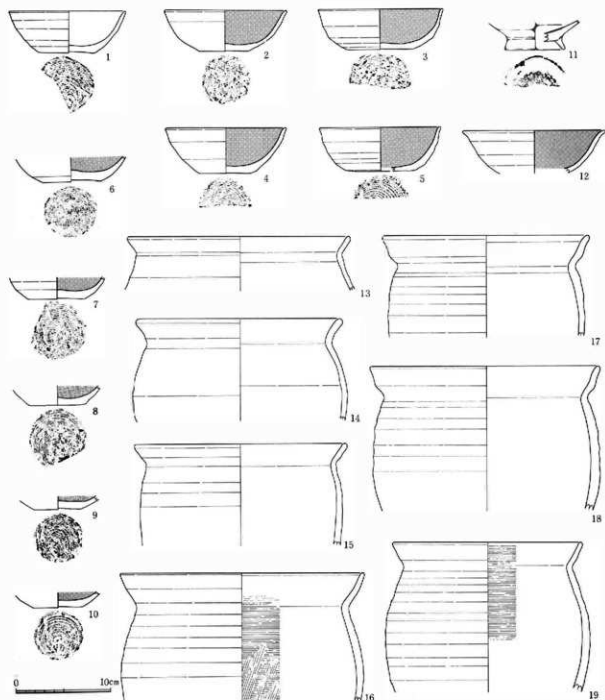


図30 58号住居出土遺物

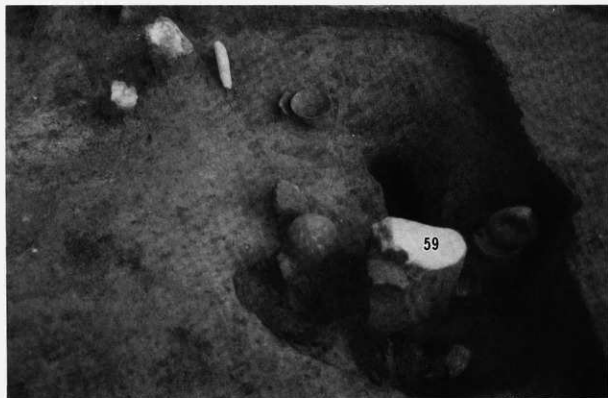
### 59号住居

住居址としてはもっとも西端に位置し、58号住居により北東部が切り込まれる。形態は方形を呈する。カマドは東壁に設置され、58号より中央よりに位置する。58号により北側半分ほど破壊を受け、また調査では構築石材・焼土塊化した火床を確認したにすぎない。カマド右の南東隅には不整形の掘り込みがあり、貯蔵穴と考えられる。土器出土はここからのものが多い。床面は軟弱でやや東側に傾斜する。

遺物の出土量は比較的多い。器種には灰釉陶器段皿、須恵器杯(図131-2~6)・広口壺(1)・甕、土師器杯(9~21)台付皿(7)・台付碗(8)・甕(24・25)がある。杯・皿類のロクロからの切離しは糸によって



58号住居の遺物出土状態



59号住居の遺物出土状態

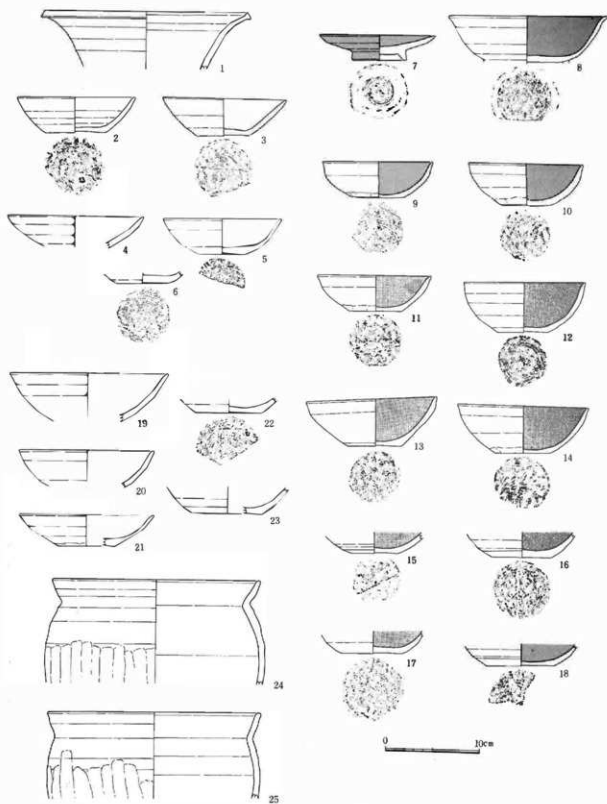


図131 59号住居出土遺物

おり、その痕跡を留める。土師器はヘラケズリによりさらに調整される。7は両面とも研磨され黒色を呈する。8～18の内面も研磨され黒色処理が施される。甕は体部上半以上をロクロにより調整された後、肩部から下方は縦方向のヘラケズリが施され、器壁を薄くしている。

## 土壇

2号・3号・5号・6号・8号・9号土壇は井戸状のもので、調査では検出面から2m程度追及したが、底面には至っていない。直径1.2~1.5mの規模である。これらは出土遺物から平安時代末以降中世にかけての所産と考えられる。

出土遺物には、須恵器・土師器・中世陶器のほか8号からは土鍾（図134-1）、9号からは頁岩製の定角の硯（2）・火山弾製の凹石（3）が出土している。

11号土壇は楕円形の浅いもので上記のものとは性格を異にしている。完形の土師器杯（図132）が出土している。

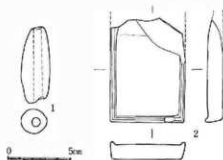


図134 8号土壇・9号土壇出土遺物



図132 11号土壇出土遺物

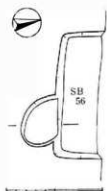
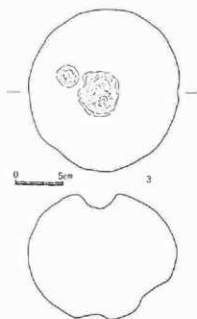


図133 11号土壇

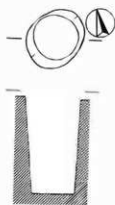
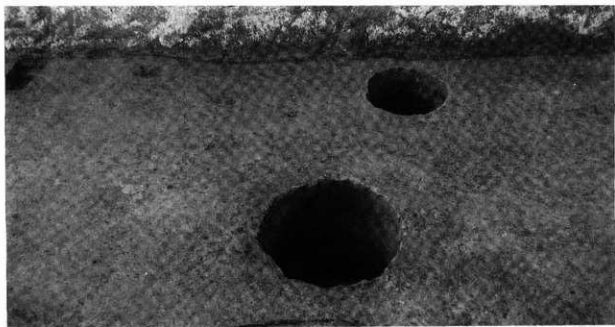


図135 9号土壇



8号土壇・9号土壇

## B区-1号溝・2号溝

第2次(平成2年度)調査において検出された溝で、調査範囲のほぼ全域を占めている。2号溝については、調査範囲の南において一部が検出されたに留まるため、その全容については不明の点が多い。

### 1号溝の規模と形態(図136)

検出された範囲での平面形は幅2.5m内外の直線形態で、N-53°-Eの走行方向をみせる。ただし、調査範囲西南端でわずかに屈曲する状況が観察される。その連続が第1次調査区範囲においては確認することができなため、おそらく徐々に屈曲を強めて東側へと蛇行して行くものと推定される。断面形は特異な形態をみせる。溝掘り込み面は平地ではなく、北西側と南東側に70~80cmの高低差が認められ、段差をもつ地形上に構築されているらしい。現在の地形においても確認されるとおり、調査範囲は千曲川の河川城から自然堤防への高まりを見せる接点に当たり、かつては、調査位置を境として南東側は一面の草原であったという話も伝聞される。おそらく、溝構築時にも同様の地形が展開し、その自然堤防への段差境界を利用して溝が開削されたものと推定される。溝に付属する施設として、北西壁に3~3.5m間隔に設置された幅0.5~1mの階段状の切り込みと、それに対応するように南東へ延びる浅い溝とがある。また、その2.5m先には20cm程の段差が生じ高まりを見せており、この位置までを溝の範囲と考えることもできる。このほか溝の掘り込み面北西側に小穴・小溝群が分布しているが、直接溝とのかかわりをもつ可能性は低いものと思われる。

### 1号溝の埋没状態(図137)

溝内覆土の堆積は最大で1.3mを測る。基本的な土層堆積として1~9層を設定した。4層と7層は黄褐色シルトであり、河川の急激な氾濫により一挙に堆積したものと判断される。これとは対比的に、5層と8層は黒褐色の粘土であり、滞水状態を経た緩やかな連続的堆積に基づくものと判断される。注目すべきは、5層上面がヒビ割れて4層黄褐色土が貫入し、亀甲状の模様が形成されている点である。この現象は、5層の形成が滞水状態で進行し、突発的に乾燥状態に移行してヒビ割れが生じた直後、さらに急激に6層が堆積したことを示唆するものであろう。仁和4年(888)千曲川流域を襲ったと伝えられる大洪水は、上流で大規模に堰き止められた水流が一挙に押し出された結果と見る向きもあるようであるが、もしそれが事実であるならば、本遺構の埋没過程にお

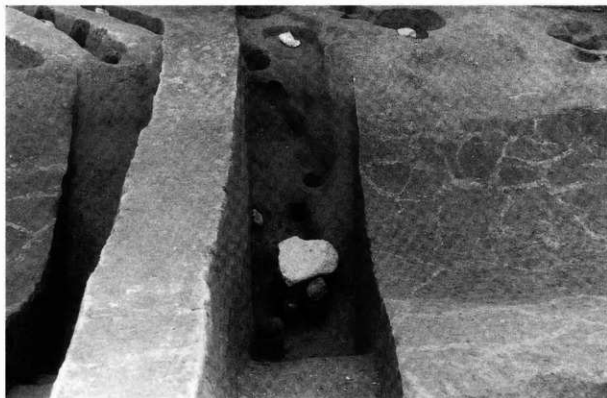


B区-1号溝掘り下げの途上(北東より)  
氾濫層(第4層)による埋没直前の状態

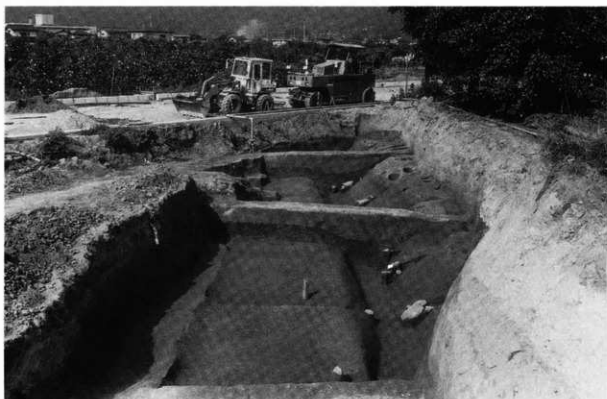




B区-1号溝掘り下げの途上（南西より）



B区-1号溝試掘坑と第5層上面の亀甲状ヒビ割れ

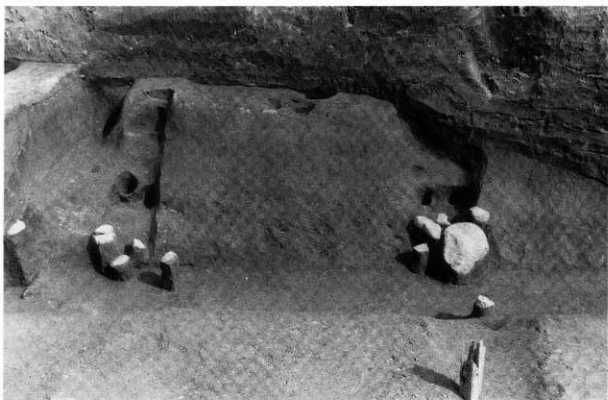


B区-1号溝掘り下げ完了（北東より）

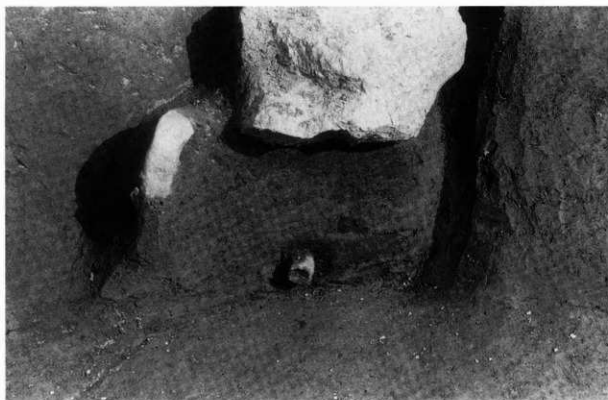


B区-1号溝掘り下げ完了（南西より）

構築以後の堆積土を除去した状態



B区-1号溝の階段状切り込み



B区-1号溝階段状切り込み部  
底面出土の鉄管

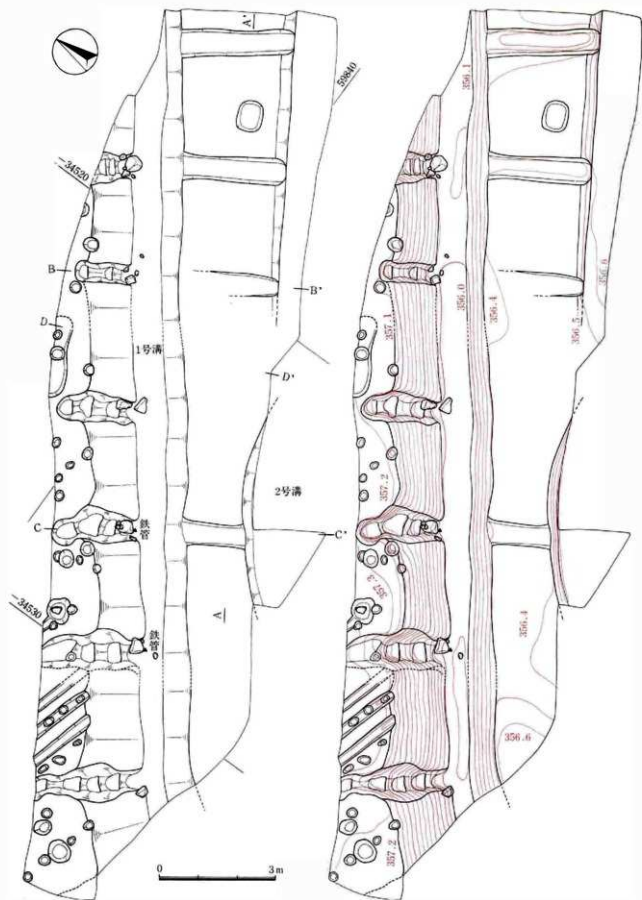
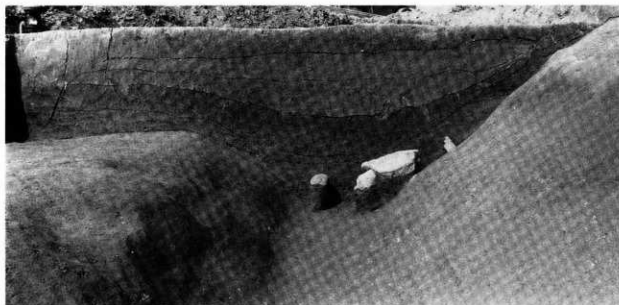


图136 B区-1号沟·2号沟 (1:100)



1号溝の覆土堆積状態

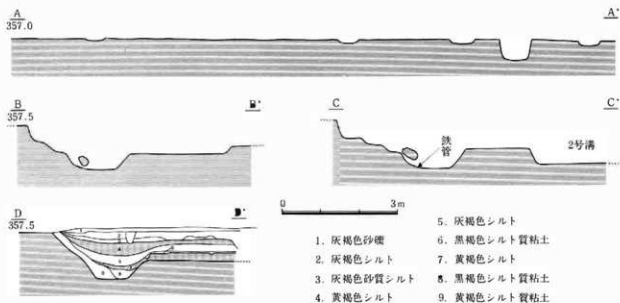


図137 B区-1号溝断面・土層 (1:100)

ける滞水状態からの急激な乾燥とその直後の氾濫堆積のあり方には、符合する事象の結果と判断するに十分といえそうである。なお、次に述べる出土遺物の年代観からは、溝の閉削から埋没時期を奈良時代から平安時代前半期と推定することが可能であり、埋没年代を仁和4年の大洪水と結びつけることを妨げていない。

#### 1号溝の出土遺物 (図138)

覆土内からの遺物出土量はきわめて少ない。溝埋没初期の段階の土層(5・8層)から出土したものが大半であり、氾濫層(4・7層)には遺物が包含されていない。須恵器蓋・高台付杯・杯(1~5)、土師器杯・小形甕(6・7)、石錘の一種と考えられる四方にえぐりのある平石(8)、鉄管(9)などが図示できる。鉄管は同型のものがもう1点出土している。いずれも階段状の切り込み部分底面近くに集積された礫層の下に位置し、溝底面に張り付く形で出土している。類例を知らず、用途は不明といわざるをえない。

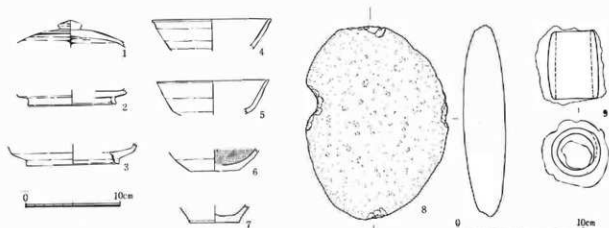


図138 B区-1号溝出土遺物(8・9-1)

### 1号溝の性格

溝の構築位置と形態から考えて、その機能として自然堤防の集落境界沿いに巡らされたある種の水路であった可能性を指摘することができる。出土遺物から、機能した年代を奈良時代から平安時代の前半期に限定することもできる。しかし、等間隔に配置された階段状の切り込み施設・その底面近くに集積された燧群・用途不明の鉄管出土など、溝の機能に深くかかわりをもつ事項に、なお検討を残す余地がありそうである。さらに、溝底面がわずかに南西方向に傾斜を見せる程度ではほとんど落差が認められないこと、溝が氾濫等で短期間に埋没したとしても、あまりに覆土中からの遺物出土が少ないこと、について注意を払わねばならない。水路として機能する生活にかかわる溝は、衛生上の観点から排水しやすい構造をとるとは考えられない。また、集落に近接する水路であるなら、当然のことながら廃棄物の投入が多く、出土遺物も豊富であるはずと考える。本遺構に関してはこの2点を根拠として、生活にかかわる用・排水路という用途を除外して考える必要がある。いずれにせよ、自然堤防上の集落とその外縁部にあたる低地との境界部分に設置された特殊な溝として、その性格について再検討が期待されるであろう。



B区-1号溝(東より)

## まとめにかえて（弥生時代に関する覚書）

### 弥生時代前期併行期

弥生時代中期の49号住居の覆土中から、該期に属する浮線文・細密条線を施した土器破片が比較的まとまって出土している。これら、縄文晩期水式系統の土器は、これまで千曲川自然堤防上の集落遺跡で断片的な出土例が確認されてきた。また、近年の発掘調査規模の拡大にともない、土器墳墓・石囲炉などの遺構にともなう良好な資料の検出もいくつかを数える所となっている。この時期に、水稲耕作の適地を求めて、千曲川自然堤防上に集落を構えた縄文晩期人（現段階で縄文土器と位置付けられている土器を用いた人々）の集団が存在したことを裏付ける一連の資料となろう。その存在が証明される日も近い情勢のなかで、あらためて、この地域の弥生時代の始まりについて、時代区分を睨んだ論議が必要とされる。はたして水式系土器が縄文時代晩期の位置を堅持できるものなのか、あるいは、弥生時代へと編入される立場にあるものなのか、興味は尽きない。なお、土器以外の遺物として、打製石斧類（石罫）・凹石など石器類がこの時期に目立って数量を増すと推定される。この調査でも、比較的多数の凹石出土がある。該期に属する遺物が含まれている可能性は高い。また、敲打痕を残す磨製石斧も刃部幅が狭く、大型蛤刃石斧とは一見様相を異にしている。該期に属する可能性も指摘しておきたい。

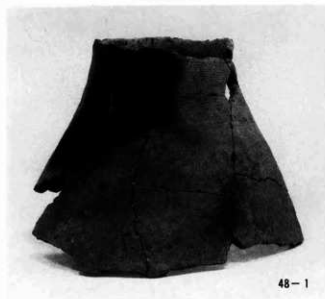
### 弥生時代中期後半

断片的ながら、4軒の住居が検出され、検出面等からも土器破片の出土が比較的多く見られる。出土土器は、栗林式系の土器群の中で新しい様相を示す一群としてとらえられる。例として、縄文施文の消失化、壺頸部の籐状文施文など、文様構成のなかに後続する土器様相に近づく傾向が目立つ。残念ながら、組成・各器種の形態変化にまで言及するには至らない。栗林式系統の土器様相は、中信地方では「百瀬式」として、群馬県では「竜見町式」として、その終末の様相が抽出されてはいるが、千曲川流域においては、未だ良好な資料（笹沢浩氏が設定した百瀬式併行期）が提示されていない。栗林式系土器群の各地域単位での変異を見越して、千曲川流域での百瀬式併行期存在に疑問を投げ掛ける意見もあるが、栗林式系土器群の崩壊過程と後続する「吉田式」への連接を説明するために欠くことのできない一時期として重視する立場を守りたい。さらに資料の蓄積が待たれる。

### 弥生時代後期とその直後

集落あるいは墓域として比較的安定した継続性がうかがわれ、いくつかの小期に分割が可能かと思われる。その中で、最古段階を形成する一群の土器様相（大多数の住居出土土器をこれに当てる）について注意しておきたい。壺には頸部施文に見られる複数の文様構成・赤色塗彩の部分的施行と個体差など、笹沢浩氏の設定した「吉田式」にみられる多様な様相のうち的一端と共通する要素が認められる。単にそれを取り上げれば、恐らく「吉田式」の範疇でとらえる見方も可能である。しかし、「吉田式」の名称により包括されるべき土器様相の吟味が不十分のまま、箱清水式の土器様相といかに区別されるべきかという明確な論議も経ないまま、「吉田式」との比較をうんぬんするのは方法として不適当に思える。ここでは、箱清水式様相中の一つの姿を示す土器群として位置付けたい。また、共伴を確認した近江系・北陸系壺の存在は、時間軸の設定に関連して重要な資料である。

現在「吉田式」はその時間的位置を拡大しながら、「吉田式以外の箱清水式」と前後の関係をもって弥生後期を分割する概念として用いられる場合が多く見受けられる。この場合、「吉田式」という名称は、漠然と弥生後期内の新古の段階を示す時期概念に似て、型式設定当初の、箱清水式から除外される土器様相としての、「吉田式」存立意義の面影を留めてはいない。このような状況のなか、「吉田式」設定時に立ち戻り、あらためてその意義について検討を試みる必要性を痛感する。中期・栗林式の土器群の崩壊と、後期・箱清水式の土器群への変換時期に、固定される可能性を提起した「吉田式」設定の意義は、まさに再評価されるべき価値をもつ。







30-1



43-1



50-1



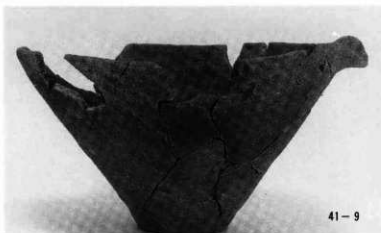
20-1



70-1



41-5



41-9



57-2



24-1



41-15



41-14



50-8



73-1



61-2

